

《研究目的》自宅で暮らす軽度・中等度認知症高齢者と家族に関わる訪問看護師の行動とその意図を記述する

《研究方法》

1. 研究デザイン：本研究の目的に沿い、自宅で暮らす軽度・中等度認知症高齢者を受け持ち事例が 5 例以上ある看護師に訪問看護師に半構成的面接を行った。面接で実際にやってきた看護実践の内容となぜそのような行動をとったのかについて語られた内容を分析するため、質的記述的デザインを選択した。
2. 研究対象：対象は、自宅で暮らす軽度・中等度認知症高齢者を受け持った事例数が 5 事例以上ある訪問看護師 5 名であった。
3. データ収集方法
 - 1) データ収集期間： 2013 年 10 月から 2013 年 11 月
 - 2) データ収集施設： 東京近郊で自宅に暮らす軽度・中等度認知症高齢者の看護実践を行った訪問看護実績の割合が高いとされる訪問看護事業所を便宜的に抽出したうち、研究協力の得られた事業所

《結果》

対象者の属性は、女性が 5 名、平均年齢は 46.2 歳であった。看護師経験年数の平均は 21 年、訪問看護師経験年齢は 10.6 年であった。受持ち事例数の平均 15 例であり、認知症に関わる研修受講回数平均約 7.5 回であり、認知症に関わる資格保持者はなかった。カテゴリーは、【家族が泥沼状態から抜け出すために助け舟を出す】、【家族みんながこれでよかったと思えるために、その時できる最善の方策を導き出す】、【本人に自分の居場所を実感させるために、丁寧にことをすすめる】という 3 つが抽出された。自宅に暮らす軽度・中等度認知症高齢者に関わる訪問看護師の行動は、家族の危機的な関係性の解消、家族介護者の介護継続可能な心理的支援、本人の自己存在の意味付け、家族関係の再構築、療養に関する家族の意思決定支援であった。そして、訪問看護師の意図することは、認知症という病を体験した家族それぞれが、それまでの暮らし方から、新たな家族の関係性を捉え直すことであった。

《結論》

認知症高齢者と共に暮らす家族に関わる訪問看護師は、家族の関係性の再構築に視点を置いていた。そして訪問看護師は、それまでの家族の関係性から認知症という病を体験した家族が、家族の歴史と共に新たな家族の在り方を捉え直すことを意図して行動していた。従って訪問看護師は、家族を心理的に支えながら、暮らしの中で介護を続ける方法を実際に行い模索し家族と共に方策を考えるよう関わることであるため、家族がありのままの様を見せられる自宅という場に出向き、看護実践を行う意義があることだと言える。